村山民俗学会

第401号
発行日　2025年3月1日
発行責任者　相原　一士
編集担当　岩鼻 通明

「奥の細道」と妖狐伝説

相原 一士

松尾芭蕉は元禄二年（一六八九）の「奥の細道」行脚で黒羽・那須（那須郡那須町湯本）にて妖怪伝説の地を訪れている。玉藻前の古塚（玉藻稲荷神社脇：那須郡黒羽町字篠原）と殺生石である。

玉藻前の伝説は、天竺・唐・殷を滅ぼして日本に渡来した妖狐が玉藻前という美女に化けて鳥羽天皇の寵姫となり日本を傾けようとする話で、最後に玉藻前は陰陽師に正体を見破られて那須野に逃げるも退治される。その妖狐の怨念が凝って殺生石と変じ、毒気を発して死後も人や鳥獣に害をなしたと伝えられている。

玉藻前の古塚（狐塚祠）は、玉藻前を祀る玉藻稲荷神社脇にあるが、そこに芭蕉が訪れたと断言することはできない。そこから少し離れた所にも狐塚と伝えられるものがあるからだ。因みに同神社の鳥居脇の鏡が池には、妖狐が逃走する際に姿を隠そうとして化身した蝉の正体を映したという伝説が残されている。

さて、殺生石を実見した芭蕉は紀行文『おくのほそ道』に「殺生石は温泉の出る山陰にあり。石の毒気いまだほろびず、蜂・蝶のたぐひ、真砂の色の見えぬほどかさなり死す。」と記し、殺生石の瘴気の影響力が衰えていない事を伝えているが、今日ではその瘴気は石が発する怨念ではなく、硫化水素ガス等の火山性有毒ガスであることが知られているのは言うまでもない。『おくのほそ道』には収められていないが、この時、芭蕉は「石の香や夏草赤く露あつし」と詠んで、石の毒気により夏草が赤く焼け、露までも熱を持った様を表現したことが『曾良旅日記』に残されていてわかる。

玉藻の前に化身していた妖狐は当初は二尾（または、三尾、九尾）の古狐であったものが江戸中期に金毛白面九尾の狐とされる様になる。この伝説は、芭蕉没後に浄瑠璃「玉藻前曦袂」（寛延四年[一七五一]）や歌舞伎「三国妖婦伝」（文化四年[一八〇七]）などが上演されるなど定着した物語となったが、それは芭蕉没後である。芭蕉の時代以前では、室町時代前期成立の御伽草子『玉藻の草子』や室町時代後期に初見される謡曲『殺生石』、辞典『下学集』（文安元年[一四四四]）などがあり、芭蕉はそのいずれかによって知ったのであろう。

〔参考文献〕

『おくのほそ道評釈』尾形仂　角川書店　2001
『日本ミステリアス妖怪・怪奇・妖人事典』志村有弘 編　勉誠出版　2011